

---

# 岬の住人

ノビタニアン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

岬の住人

### 【Zコード】

Z2906D

### 【作者名】

ノビターラン

### 【あらすじ】

不器用に生きてきた。朝は会社に行くために起き上がり、昼は陽を見る事もなくパソコンの相手をし、最終電車の明かりが消える頃、電車に乗り込む。食事を取ることも忘れ、時間の感覚が無くなつた時、自分は機械になっていたことによく気付く。もはや自分の存在がこの世界から消えかけていると悟つた僕は、波が打ち寄せる岬の上に立っていた。その人は言つ。例えどんな形でも、自らしく生きて下さい。

## 其の一

上手く生きることができなかつた。

小学生で大人が信じられなくなり、中学生で人が信じられなくなり、高校を出る頃には自分を見失つた。

今、振り返つてみると一人の時間が多かつたように思える。唯一、趣味と呼べるバイクで時々海を見に行つた。

それだけが自分を人に近付ける手段だつたんだと思う。決して優秀ではなかつたが、大学をなんとか卒業することが出来、ここから電車を一時間ほど乗り継いだところの小さな会社に就職もした。

朝、準備もままならない状態で家を飛び出し、人一人がやつと立つことのできる快速急行に乗る。

鉛のような重く冷たい空気が流れる事務所で延々パソコンの相手をし、気付いた時には、もう日付が変わろうとしている。最終電車のアナウンスが流れる駅で電光掲示板の明かりが消えるのを確認してから、再び電車に乗つて朝へと戻つてゆく。

食事、というものは習慣ではなく、欲でもなく、ただ生きる為の義務として行つている感覚。

朝昼夜。どのタイミングで食事を取ればいいのか既に忘れていた自分は、コンビニに置かれている、今喉に通りそうなものをいくつか選んで体に無理矢理流し込んでいた。

機械。自分が機械になれたらどんなに楽だらう。

冷たい感情が支配し、時間を失つた世界。

街を歩く群衆が皆のつぺら坊に見える。

今日も最終電車に乗つて、暗く歪んだワンルームの扉を再び開いた時、自分の存在が既にこの世界から消えかかっていることに気付いた。

ようやく気付いた、と表現する方が今は正しいのかもしれない。  
もう人間として生きてすらいないと語った時、三年間繰り返した生活を一枚の紙切れで終わらせることにした。

不思議なもので。

空になつたはずなのに、自分の中に一つの欲求があつたことを知る。  
また海を見たい。

駐輪場で金食い虫に成り下がつていたバイクに命を吹き込み、勢い良くなきアクセルを回す。

懐かしむように大きな音を立てて、バイクは僕を乗せて走ってくれた。

どれくらい走り続けたのかは覚えていない。

すっかり辺りが暗くなつた頃、海が一望できる岬に僕は立つていた。遠くに港町の明かりがうつすらと見える。

波の音は一定の間隔で、ザザー、ザザーッと鳴つていた。

夜の海はこんなにも不気味で、冷たくて、それなのに母の手の中のよくな深い優しさを感じる。

どこまでも続く闇がとても心地よい。そつと僕を包み込んで、無へと流してくれるようなそんなことを思つ。

どうせ消えかかった存在。これからの中標もなく、目的もない。ついには生きる意味を見失つてしまつた。

何もない。もう何もない。

ただここに残る肉体を葬つてしまえば、少しは楽になれるのだろうか。

切り立つ岬に歩を進める。吸い込まれるよつた闇に体を預けようと。

ふと足元に目をやると一枚の写真が落ちていた。

これは…家族写真？

仲の良さそうな夫婦の間に制服を着た少女が写つている。

なぜこんなところに。  
まさか。

岬から海を見下ろした。

波が岩場に打ち付けられる音しか聞こえず何も見えない。  
ただ、そこには闇があるだけ。

闇がさつきより深さを増しているように思え、少なからず恐怖というものを感じていた。

「もし、そこのお方。」

後ろから声が聞こえ、驚いて振り返った。

そこには赤い提灯(ちよひな)を持って綺麗な着物を纏つた老婆が立っていた。  
僕は持っていた写真を、とっさにジーパンのポケットにねじ込んだ。

「宿はもうお決まりですかえ？」

赤い光が僕を照らす。

「いえ、まだ。でも宿を取るつもりは……。」

さつきまで人の気配など感じなかつた。何時の間に。老婆の持つ提灯がユラユラ揺れて辺りを赤く染めてゆく。

「でしたら、お食事だけでも取つていかれたらどうでしょ？ わたくし、この先にある宿の案内人をしてあります。」

老婆はそう言って、海とは反対側を指差した。  
小さな丘に、明かりが灯っているのが見える。  
今まで気付かなかつたが、かなり大きな建物のようだ。

背の高い林からあれだけ顔を出しているんだ、間違いないだろ？自分が空腹を感じているのを知り、最後の晚餐も悪くないと思つた。

「そうですね。夕食だけ頂いてもよろしいでしょうか。」

老婆はゆっくり頷いて歩きだした。  
後について僕も歩きだす。

「あれ…。バイクは…。バイクがないぞ。」

岬に続く階段前に停めておいたバイクが無くなっていた。キーでハンドルロックもかけ、太い鉄のチェーンもしたはずなのに。  
誰かが持つていった？

いや、大型バイクだ、誰かが持ち上げるのは不可能だ。車やトラックで運んだとも考えられない。こんなに暗く、静かな場所だ。  
車やトラックが近付いてきたらすぐにわかる。  
じゃあ、バイクはどこに？

…でも、もう必要ないか。帰る手段があつても仕方のないことだ。

「わたくしが来た頃には何もありませんでしたが。明日警察に届けてみてはいいかがでしょう。小さな町です。どこかに置かれているならすぐに見つかるでしょう。」

老婆がそう言つた後、暗闇の向こうから一筋の光が近付いてきた。  
古い形をした送迎バス。昔に家族と一度だけ温泉へ行つたことがある。その時に乗つたバスにそっくりだった。

「さあ、お乗り下さい。」

老婆が僕の背中を押す。

「あなたは？乗らないのですか？」

「わたくしは、案内人で」」やることます。」

赤い光に照らされた老婆は、微笑みながら頭を下げる。

「どうぞ、」」あること。お氣の済むままで」

バスはゆっくりと丘を田指して走りだす。

薄暗い車内から、暗黒の海を眺めると、改めてその不気味さと永遠の安らぎを伝えてくれるような静寂さの共存を確かめることができた。

10分ほどだつただろうか。

林を抜けたその先には、見上げるほどの大旅館があつた。  
こんなところにこんなものが。

少々驚きながらも、感動に似たものを感じていた。

湯気が奥から立ち上り、全ての部屋に明かりが灯っている。

有名な温泉宿なのだろうか。

石畳の先にある玄関をくぐると、白く透き通るような着物を纏った女性が出迎えてくれた。

「ようこそいらっしゃいました。わたくし、女将の白羽と申します。

」

「あ、わしき案内人の方に……。」

「話は聞いておつます。まずはお部屋に御上がり下さいな。」

そう言って女性は優しく微笑んだ。綺麗な白い袖がヒラヒラと舞い、

思わず見とれてしまいそうなほど美しい人だった。

「でも…予約もしてないですし。」

「お部屋はござります。まずは温泉で汗をお流し下さいな。すぐに  
お食事をお持ち致します。」

こんな大きな旅館に予約もなしで？

外から見た時はえらく繁盛しているように感じたが。それほど部屋  
数があるのだろうか。

さぞかし、高いんだろうな。

財布を取り出し、思わずキヤッショカードを確認した。

「揚羽あげは！お客様をお部屋に案内して頂戴。すぐに温泉に行かれるわ。

」

女将がそう声を掛けると、奥の廊下からもう一人顔を出した。

「今違うお客様の」と退室の準備をしてるのよー私は何人もいないん  
だからー！」

黒に山吹色の水玉と、雨上がりの空をイメージさせる群青の水玉を  
ちりばめた、艶やかな着物の女性が忙しそうにしている。

「なんて言葉使いを…。申し訳ございません。まだ新人なもので。」

「ああ、大丈夫です。」

黒い着物の女性が、小さなカバンを持って、それを抱えてひきひきしゃ  
つてきた。

その後ろに続いて、もう一人、分厚いパーカーを着た少女の姿が。

「お客様お帰りになられます。バスは？」

「ええ、表に。」

黒い着物の女性は、少女にカバンを渡し、深々と頭を下げた。カバンを受け取る少女の腕には、包帯が巻かれていた。見覚えがある。

この人、どこかで…。

「お世話になりました。ありがとうございます。頑張ってみます。」

少女はそう言うにつてこり笑つて玄関を出ていった。霧に包まれたかと思うとすぐに見えなくなつた。

「さ、お待たせしました。私、揚羽がお部屋へといき案内致します。」

よく見ると、女将によく似た、とても美しい人だった。緑の瞳をしたその人はどこか儂げで、不思議な雰囲気を持つていた。

これは、僕が過ごした、たつた一夜の出来事。

「よつじや。 真世庵へ。」

## 其の一

揚羽と名乗ったその女性は僕を一階にある密室へと通した。いくつものドアが並ぶ長い廊下。所々に海が描かれた水彩画が飾られており、床は驚くほど綺麗に磨かれていて、まるで鏡のようだつた。

しかし建物の豪勢さに比べると、部屋は幾分か質素なもので小さな畳の間の先はガラス張りの大窓があるだけだった。

丘の上にあるだけあって、そこからの眺めは大したものであつたが。「温泉は一階の突き当たりです。夕食はその後持ってきますね。何がありましたら呼んでください。」

白羽という女将に比べると、やはり揚羽の言葉は少し若者言葉が交ざつており、話すイントネーションもフワフワと軽い感じがした。失礼しますと襖が閉まる。

同時にこの部屋に静寂がやつてくる。大窓から波の音が微かに聞こえている。

暗闇からザー、ザーと鳴る波の音、カタカタと窓を鳴らす風の音は、昔家族と来た温泉旅行を思い出させる。

懐かしさが込み上げ、しばらく海を眺めたまま動けなかつた。

一階突き当たりに、男湯、女湯と書かれた暖簾がぶら下がつている。僕は暖簾をくぐり、脱衣場に入った。

がらんとした脱衣場に人の気配はなく、着物入れが規則正しく並べられている。綺麗に整頓されている、というより何もない、という印象。

ここにたどり着いた時は、えらく繁盛しているよつて思えたのだが……。

温泉へと続く廊下も、異様に静かで誰ともすれ違うことがなかつた。こんなに大きな旅館なら、それなりに従業員の数もいるだろう。しかしここまで、僕の知つている人は女将の白羽、黒い着物の揚羽だけだつた。

胸ふに落ちない部分を抱えながらも、混雑しているよりマシかと思い、服を脱ぐ。

ジーパンのポケットに手を突っ込むと、一枚の写真が出てきた。岬で拾つた一枚の家族写真。

そういうえばポケットに入れちゃつてたんだな…。

その家族写真を再び見た時、さつき玄関での出来事を思い出した。この真ん中に写っている制服を着た少女。先程小さなカバンを抱えてこの旅館を出でいつた少女。

少し瘦せていて、私服だつたせいもあり、さつきはわからなかつたが紛れもなくここに写る少女本人だつた。

よかつた。生きてたんだな。本当によかつた。

いつの間にか、誰かを心配できるほどの余裕が僕には生まれていた。

部屋に戻ると既に布団がひかれており、お膳に夕食が並べられていた。

さすが港町といったところか。

テレビくらいでしか見たことのない、新鮮な海の幸だ。

下の階から人の騒ぎ声が聞こえる。宴会でも開かれているのだろうか。

やはりたくさん宿泊客がこの宿にはいるようだつた。

どういう流れで一泊することになつたのかはよくわからない。気付いたら僕は部屋の明かりを消し布団に潜り込んでいた。

海が見たいと思つた。

引き寄せられるようにやつてきたこの岬で海を眺めていると、そのまま身を投げてしまいたい衝動に駆られた。

このまま消えてしまつても… そう思つた。

その時、突然現れた老婆に赤い光を照らされて…。風が強くなつて波が荒れている音が聞こえる。なかなか眠ることができない。

(もう〇時過ぎか。)

僕は起きだし、何か飲み物でも、と思い廊下に出た。相変わらずシンと静まり返つた廊下。淡い光が道を照らしだし不思議な感じがする。

一階のロビーに腰掛けペットボトルのキャップを回す。

風はどんどん強さを増し、玄関の戸をガタガタと鳴らしている。

海の夜はこんなにも荒々しくて、人を不安にさせるのか。僕の闇にスッと入り込んでくるようで、少なからず恐怖というものを感じていた。

「どうかしましたか?」

暗闇から誰かの声が聞こえた。

揚羽がこちらを見て優しく微笑んでいる。

「ちょっと眠れなくて…。」

揚羽はフフフと笑うと僕の横に腰掛けた。甘い花のような香りがある。改めて見ても本当に綺麗な顔立ちをしている。透き通った緑色の瞳が僕をじっと見つめていた。

「やつあはいめんなさいね。」

「やつあ?」

「ほら、あなたが旅館にやつてきた時。私バタバタしちゃって。」

「ああ、かまわないよ。繁盛してるみたいだね。」

揚羽は笑った。

片方だけ生えた八重歯。

この人はこんな風に笑うのか。まだその笑顔には無邪気さの欠けらが残っていた。

「あなた、学生さん？」

「いや、とっくに卒業しているよ。一応は社会人。今は社会人だったと言つたほうがいいかな。」

そうだつたんですね。

揚羽はそう言って一つ呼吸を置いた。

「あなたもまた、道に迷つているのですね。」

「え？」

「今日」退室された女性も、あなたと同じ。迷い人でした。学校でひどく辛い経験をされたようで。でもその人はここで新しい自分に出会うことができたみたいでした。」

やはりあの時の少女は自分と同じ、一度あの岬から身を投げようとしていたようだった。腕に巻かれた包帯も、恐らくは、その辛さの傷跡…。

「そうだ、これを。ここに来る途中に拾つたんだけど。」

僕は写真を取り出す。

「これは。わかりました。」ちらで預かっておきます。あの人にとつてとても大事なものだと思います。これこそ、あの人には新しい自分を与えた存在ですから。」

揚羽はそう言って写真を受け取った。

「あなたの存在の証明って、何だと思います？」

緑色の瞳が再び僕を見つめる。

「存在の証明？」

「私の場合はこの場所がそうです。今はそう思えます。私、ほんとは演劇をやりたかったんですよ。中学も演劇部で。高校でも演劇をやろうと思ってたんです。舞台に立つのが夢で。でも、ここが私の実家だから。」

「後継ぎ…か。」

「一人娘ですかね。」

揚羽は無邪気に笑っている。

「この旅館も忙しくなって、人手も足りなくなつて。高校も中退しちゃつたんです。私もこの旅館に入るためには。」

「そうだったんだね。」

「はい…。」

伏し目になつた揚羽が急に大人びた表情を見せた。  
白羽さんによく似ている。

「私の場合、最初から歩く道が決められていた。ただそれだけです。」

「でも、君のやりたいことは？」

「私にとって、それが必要なものだつたのかはわかりません。今もずっと。でもお母さんにとつて私が必要な存在でした。もちろん私にとつても。だから旅館に入る覚悟もできたんだと思います。今はここで働けてよかつたと思っています。あなたにも、こうして会えて話すことができました。」

自分は随分小さなことで頭を抱えていたのだと感じた。まだ若いこんな子でさえ、自分を受けとめ、運命を受けとめている。  
僕はこの先が見えなかつたんじやない。見ようとしていなかつたんだ。

強く自分を生きる揚羽は、僕よりずっと大人びて感じる。

「これから…見つかるかな。自分の存在する意味を。」

「あなたが望むのなら。迷つたら少し休んでまた歩けばいいだけです。まだ無限に道は広がっていますよ。」

揚羽は再び僕を見つめ、優しく微笑みかけてくれた。僕の中の闇がゆっくり中和されはじめ、晴れやかな気分を与えてくれる。

揚羽の言葉、一つ一つに強さを感じた。  
その気付かてくれた言葉こそが、僕の生きる証明のきっかけにな  
つたのかもしれない。

「揚羽ー宴會場の片付けは終わったの?」

奥の廊下から白羽さんのが聞こえた。

「あ、やっぱーお母さんだーすぐ行きます!」

揚羽は急いで立ち上がり深々と頭を下げる。

奥の廊下に消えていく揚羽。振り返りざま、揚羽は最後にこう言つ  
た。

「例えどんな形でも、自分らしく生きて下さい。」

黒い着物を翻し、そのまま夜に溶けていった。  
ちりばめられた水玉が更に色を増し、美しく闇に冴える。  
それはまるで、夜空に浮かぶ揚羽蝶のようだった。

いつの間に眠ってしまったのだろう。

遠いようで近くにある記憶が頭の中をチラついている。

浅い眠りだったのだろうか。夢を見ていたようだった。

夢の中で僕は、花が咲き乱れる草原に立っていて、淡く光る無数の蝶が舞っている。

月の光がこの場所を照らしだし、幻想的な世界を作り上げていた。

「あそこに揚羽蝶がいるよ。」

「ほんと。綺麗な蝶々ね。」

「ほり、あそこには紋白蝶も。」

まだ幼い自分が母と父に手を繋がれて無数に舞う蝶を見つめていた。とても懐かしく、暖かい夢だった。

目を覚ますと、僕は岬にいた。

打ち寄せる波の音がすぐ近くで聞こえてくる。

（確かに昨日は旅館に宿泊したはず…。）

まだ朦朧とする意識。絡まる記憶に僕は混乱していた。

（なんでここに…？）

昨夜、揚羽の後ろ姿を見送った後、外の風が止んで再び夜が静寂を取り戻していた。

自分らしく生きて。

その言葉に勇気をもらい、もう少し頑張つてみようと決心した。

そこまでは確かに覚えていた。

しかし、その後の記憶が全くなかった。自分がどうやって部屋に戻ったのか。どうやってここまで来たのか。

一体、どこまでが夢だったのだろう。

振り返ると、階段前にバイクが停まっていた。昨日はなかったはずのバイク。

キチンとロックもかけられており、動かされた形跡もなかった。

狐に包まれる感覚、というのはこういうことなのだろう。

首を何度も傾げながら僕はバイクにまたがり岬を後にした。

朝焼けに輝く海は、昨日の表情とは打って変わつて希望に満ちているようだった。

まるで僕の背中を押すように。

それから僕は、実家に戻り再就職をした。

と言つても、今は田舎で農家を営む父と母の手伝いをしているだけで、前みたいに組織に属しバリバリ働いているわけではない。

しかし、日が昇ると畠に出て、日が沈む頃には家に帰つて家族の時間を使つ。質素であつたが、人間らしい生き方が戻つて僕は満足をしていた。

就職する前は考えてもみなかつた。田舎での農家暮らしを。あんなに嫌がつていたはずなのに。

これが揚羽の言つていたことなのかもしれない。

それならば揚羽のように生きてみるのも悪くはない。

これが存在の証明なら。

5年後。

僕は実家を継いだ。

両親はとても喜んでくれた。見合いで結婚もした。

親は仕事を引退し、これからは僕達夫婦がこの畠を守つていかなくちゃいけない。

新しい自分が新しいレールの上を走りだす瞬間だった。

ある日、たまには一人で旅行でも、と言う両親の言葉に甘え、僕達はあの岬を見下ろす旅館へと足を運ぶことにした。

新幹線に乗つて、そこからタクシーで30分ほど走ると、懐かしい港町が見えてきた。

岬は、今も変わらずあの時のままだ。

「あ、この辺でいいです。」

僕が財布を取り出すと、タクシーの運転手は不思議そうな顔をして僕達夫婦を覗き込んだ。

「お爺さん、この岬に観光でも来たのかい？」

「いえ、あの丘の上の旅館に宿泊するんです。古くさい迎えのバスがここまで来るはずなんですが。」

タクシーの運転手は静かに頷くともう一度車に乗れと僕らに言った。迎えのバスで旅館まで行きたいという僕を、お代はいらないからと、半ば強制的に車に押し込み再び走りだした。  
バスで旅館に向かった時は生い茂る林の中を進んでいたように感じたが、今回は綺麗に整備された道を10分ほど走ると丘の上についた。

妻が窓から身を乗り出し、不思議そうに問う。

「ねえ、旅館はどこ?」

一番驚いていたのは自分自身だ。ここにあった巨大な建物は跡形もなく、だだ広い草原が広がっているだけだった。

「あれ、ここにあつたんだよ。大きな旅館が…。」

そつ言づ僕を見て、タクシーの運転手がゆっくりと口を開いた。

「確かにありましたよ。でもそれは20年前の話です。」

「20年前？」

「そんなはずはない。」

僕は確かに5年前、二この旅館にたどり着いた。そして旅館に宿泊したんだ。

温泉も入った。夕食も食べた。白羽という女将が出迎えて、揚羽という娘と話もしたんだ。

ただ不思議そうに僕を見つめる妻と、再び狐に包まれたよくな顔をする僕。

「たまにね、いらっしゃるんですよ。ここに宿泊したって人が。」

タクシーの運転手は窓の外を眺めながらじう続けた。

「あなたはここに泊まって、こいつしてここにいる。感謝すべきことですよ。さて、行きましょうか。別のお宿をご紹介します。」

そつ言づて運転手は再び車を走らせた。

僕は振り返つてもう一度、あの旅館が建っていた場所に目をやつた。草原の真ん中に一匹の揚羽蝶がヒラヒラと舞っているのが見えた気がした。

丘を降りて海沿いの道路を走りながら、運転手はこの町に伝わる不思議な話をしてくれた。

「天野六輔という人がいましてね。昔あそこで温泉宿を経営していました。その人はたくさん珍しい蝶を庭で飼っていて、それは

それは美しい宿だったと聞いております。特に水玉模様をした幻の揚羽蝶がいると巷で噂になり、毎日たくさんのお客様が幻の蝶を目見ようと宿を訪れていたそうです。しかし、あの岬で一人の人間が身を投げたことから、いつの間にか岬は自殺の名所として有名になってしまったそうでした。なんでも身を投げた人は夜中に幻の蝶を見たとか…。それから不吉な蝶の噂が流れ、客足はぱつたりと止まってしまったそうです。噂が噂を呼び、ついには町が動きました。主人は幻の蝶などいない、ただの揚羽蝶だと主張しましたが、死を呼ぶ蝶は町のイメージを壊しかねないということです。20年前、ついに宿の取り壊しが決ましたのです。死を呼ぶ蝶使いと町民から呼ばれるようになつた天野六輔は、町を追いやられることになり、最後に自らもあの岬で命を断つてしまつたのです。」

車内の空気は重く、妻が怯えた表情で僕の手を握っていた。

「じゃあ、あの旅館は、一体…。」

「まだ続きがありましてね。取り壊されてからも、ちょくちょくあの宿に泊まつたと言う人が現れるんですよ。つい最近も女性の方を乗せたんですけどね、言つてますよ。さつきあの宿から出てきたんだって。何でも、生きるのに疲れて氣付いたら岬に立つていたそうです。もう死んでしまつたほうが楽になれる。そう思つた時、赤い光が見えて、バスが迎えに来たと。」

全く一緒だった。

僕も確かに死のうと思つて岬に歩を進めていた。その時、赤い提灯を持った老婆が現れたんだ。

「不思議なことにね、皆さん口を揃えて言うのが、美しい女性に会つたと言うんです。白い着物の女性に。あそこの主人は男で、女将

はいなかつたはずなのです。従業員もほとんどが男性で、女性従業員は地元のパートタイムとして働く方達ばかり。」

白羽さんのことだとすぐにわかった。僕を出迎えた美しい女性。確かに会つていた。

けど、話と違う点がある。

僕はもう一人会つている。

「あの、僕はもう一人会つています。黒い着物の女性です。黒地に青と黄色の水玉模様をした。名を揚羽と……。」

運転手は、ほほうと唸つてみせた。

「それは珍しい…。私は初耳です。水玉模様とは、まるで幻の揚羽蝶ですな。」

運転手は声高に笑つた。

タクシーはホテルの前で停まり、僕は清算を済ませた。もうこの辺もリゾート開発が進んでいるのだろうか。素朴な風景には似合わない立派なホテルだった。

運転手は、ふと何かを思い出したかのように降車する僕らにひつそりと語り掛けた。

「そうそう。あの宿。確か真世庵と言いましたな。でも町民からはそれをもじつて迷い庵と呼ばれております。何かに迷つた迷い人が最後にたどり着く場所だとか…。何でも、その宿に宿泊した人は近いうちに大きな幸せを掴むという言い伝えもこの町にはありますな。見るところ、あなたは既に…。」

運転手は清算を完了させると車から降りてドアを開けてくれた。

「案外、死を呼ぶ幻の蝶は幸福を運んでくる幻の蝶の間違いだったのかもしれませんな！」

緑の瞳で僕を見つめながら無邪気に笑う揚羽の姿が甦る。漆黒色に、艶やかな水玉模様をあしらった着物でヒラヒラと舞いながら、今日もどこかで迷い人を導いているのかもしれない。迷い庵と呼ばれる、最後の地で。

闇夜に紛れて、一人岬に立つ女性の姿。

思い詰めた表情で暗黒の海を覗き込んでいる。

「もし、そこの御方。」

赤い光が女性を照らしました。

「お宿は、もうお決まりですかえ？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2906d/>

---

岬の住人

2010年10月14日08時32分発行